みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Yupik in Siberia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 佳代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001924

コメント 3

シベリア・ユピック語の現状と問題点

永井　佳代

シベリア・ユピック語は，アメリカ合衆国アラスカ州セント・ローレンス島および，ロシアのチュコト半島南東端で話されているエスキモー・アリュート語族に属する１言語である。この言語は話者の居住地がアメリカ合衆国とロシア連邦の２国にわたっているため，それぞれの国によって状況が異なる。話者数の変遷や公用語の影響などについてアメリカ側とロシア側それぞれの状況を概観し，アメリカ合衆国におけるシベリア・ユピック語の状況と問題点を中心に考えてみたい[1)]。

話者数

アラスカ先住民諸言語の分布と話者人口を示した地図 Krauss（1982）によると，今からちょうど20年前には，総人口が2,300人（アメリカ 1,100人，ロシア1,200人）で，話者人口は1,650人（アメリカ1,050人，ロシア600人）と報告されている。同じくクラウス博士による1995年に出版されたエスキモー諸語の言語地図 Krauss（1995）においては，総人口が2,000人（アメリカ 1,100人，ロシア900人）で，話者人口1,350人（アメリカ1,050人，ロシア300人）となっている。Web 版の『エスノローグ（*Ethnologue*）』においては，アメリカ側は1990年のセンサスから総人口1,000人，話者数808人，ロシア側は Kibrik（1991）から総人口1,200～1,500人，話者数300人と報告されていて，Krauss（1995）の報告と食い違いがみられるが，２国あわせて1,000人程度の話者がいると思われる。

ロシアのシベリア・ユピック語

ロシアに住む話者は60代以上の世代が中心で，子どもへの母語の継承はほとんど行われていない。冷戦時代には，ユピック語話者が同じ言語を話すアメリカ領のセント・ローレンス島の話者と接触を持たないようにと強制移住が行われたため，古くからのユピックの集落は存在せず，ユピック語話者は，語族の異なるチュクチ語話者，同系のナウカン語話者とともにプロヴィデーニヤやニュー・チャプリノに居住している。ユピック語話者同士でも，日常会話はロシア語で行われることが多い。後にみるアメリカ合衆国内のシベリア・ユピック語よりも危機度が高いと言える。

シベリア・ユピック語に対するロシア語の影響も，とりわけ借用語という形で多くみられる。Vakhtin（1985）によると，以下のように動詞語幹以外の要素はほとんどロシア語という表現もみられる。

（1）　Ja eto niiv-aju?
'Do I pour it?'　(niive- 'to pour') (ibid. 43)

Vakhtin (1997) によれば，ロシア語からの翻訳のために，シベリア・ユピック語のテキストに現れる文の長さがロシア語との接触以前に採集されたテキストに比べ，圧倒的に長くなっていることが報告されている。また，シベリア・ユピック語の語順は比較的自由であるが，語順においてもロシア語の語順を踏襲し，シベリア・ユピック語の語順としては不自然な文章が多くみられる。とりわけ，直接話法の場合に，引用と導入が，従来の語順と全く逆になっている。このほか，形態法において，結果を表す接尾辞 -nga をロシア語の文法範疇にある受動と解釈して用いる若い話者の存在も報告されている[2)]。

セント・ローレンス島のシベリア・ユピック語

アメリカ合衆国のセント・ローレンス島にはギャンベル，サブンガの二つの村がある。チュコト半島からほど近いこの島はアメリカ本土から遠く離れていて，住民のほとんどがシベリア・ユピックの人々であるため，消滅の危機に瀕した言語ではありながら，子どもへの母語の継承が守られていると従来されていた（Krauss 1980)。しかしながら，その継承が急速に途絶えつつあるのが現状である。1998年，筆者が初めてギャンベルを訪れた際，両親，祖父母の世代からユピック語で話しかけられても，英語で答える子どもが増えているのを目の当たりにした。サブンガに住む人の話によると，サブンガでは25歳以下の世代ではユピック語をほとんど話さない状況という。子どもたちのなかには，英語は「かっこいい」ものであるという考えがあり，また，テレビなど，メディアの影響の大きさは計り知れない。現在，島では相当数の家庭が衛星放送を受信できる環境にある。シベリア・ユピック語を母語とする子どもたちも，バスケット・ボールやビデオ・ゲームをする際の言語は完全に英語に替わっている。くわえて，他の地域出身者を配偶者とする話者も多く，それが家庭内での使用言語を英語にする要因にもなっていると考えられる。

シベリア・ユピック語にみられる英語の影響は，（2），（3）にみられるような翻訳借用のほか，（3）のように語幹要素に英語を借用する場合が多く，ロシア側の語幹以外の文法要素がすべてロシア語に替わっている（1）の例とは対照的である。

（2）　esghagh-lleq-amken 'See you later.'
see-FUT-IND.1sg.2sg.

（3）　ride-lgu-zin 'Do you have a ride?'
ride-have-INT. 2sg.

母語の継承が途絶え始めたとはいえ幅広い年齢層の話者を持つこの言語では，若年層において簡略化等の傾向が見られる。シベリア・ユピック語には単数，双数，複数の区別があるが，双数の区別が失われつつある。また，（4）のように非生産的な接尾辞を用いた語が，生産的な接尾辞を用いたものに交替している。

（4）　ghhuu-qutaq 'instrument to inflate walrus intestines'
inflate-INST（非生産的）
ghhuugh-usiq 'instrument to inflate walrus intestines'
inflate-INST（生産的）

また，若年層と老年層では語幹の意味が変化している例もみられる。次の語幹は若年層では正反対の意味を表す。

（5）　qugake- 'to pay attention; to respond'（老年層）→ 'to ignore'（若年層）

シベリア・ユピック語の活性化

次に，極地における国際語としてのシベリア・ユピック語の現状を報告しておこう。

冷戦以前には，セント・ローレンス島とチュコト半島のシベリア・ユピックの人々の間ではボートによる往来が盛んであり，チュコト半島からセント・ローレンス島への移住も盛んに行われていた。冷戦の間，その往来は途絶えたものの，冷戦終結後の1988年よりノーム（北西アラスカ）・プロヴィデーニヤ間の航路が開かれ，1989年からは住民のビザなし渡航が可能になった。ソビエト崩壊後はセント・ローレンス島住民側からのロシア側のユピックに対する生活支援や，キリスト教布教活動など往来はますます頻繁になっている。共通語としてシベリア・ユピック語が用いられ，ロシア語を母語とするチュコト半島の若年層のユピックも，この往来を機会にユピック語を習得するケースもみられる。また，国立公園局とサブンガが提携し，チュコト半島のユピックをセント・ローレンス島へ招いてのランゲージ・キャンプが行われるなど，地域での言語活性化への努力もみられる。

これまでのアラスカにおけるシベリア・ユピックの言語教育は，すべての子どもがシベリア・ユピック語を母語とするという前提のもとに，正書法を教え，正書法で書かれた読本を与えるというのが主であった。長年シベリア・ユピック語の教育教材づくりに

携わってきたある話者は，これまで会話集など，他の危機に瀕した言語において作られているような教材について考えもしなかったという。シベリア・ユピック語を理解はするけれども英語しか話さない子どもたちが増えてきていることをふまえ，半話者や，島の外で暮らすシベリア・ユピックの子どもたちのような受動的知識を持つ人々に利用可能な文法概説や会話集などの教材づくりが必要であろうと思われる。

注

1） ロシアでのシベリア・ユピック語の状況は de Reuse（1994），Vakhtin（1997）などによる。
2） 詳しくは Vakhtin（1997）参照。

文　献

Grimes, Barbara F.（ed.）

2000 *Ethnologue: Languages of the world*, 14th Edition. Dallas: SIL International Inc. 〈http://www.ethnologue. com/web. asp〉（accessed 4/11/2002）.

Kibrik, Alexandr E.

1991 Semantically ergative languages in typological perspective, *Work Papers of the Summer Institute of Linguistics*（University of North Dakota 35）, 67-90.

Krauss, Michael E.

1980 *Alaska native languages: Past, present, and future*. Alaska Native Language Center Research Papers 4. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

1982 *Native peoples and languages of Alaska*（map）. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

1995 *Inuit Nunait / Nunangit Yuget*（*Eskimo people's lands*）（map）, preliminary version. Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska.

de Reuse, Willem J.

1994 *Siberian Yupik Eskimo: The language and its contacts with Chukchi.* Salt Lake City: University of Utah Press.

Vakhtin, Nikolai

1985 Nekotorye osobennosti russko-aleutskogo dvujazychiya na komandorskikh ostrovakh, *Voprosy jazykoznaniya* 5, 35-45.

1997 Linguistic situation in the Russian Far North: Language loss and language transformation. In Osahito Miyaoka, and Minoru Oshima（eds.）*Langueges of the North Pacific Rim*, pp. 163-177. Graduate School of Letters, Kyoto University.